

## 日本語の形式名詞の諸相

奥田 智樹

## 1. はじめに

## ・形式名詞とは

「名詞のうちの特異な一類で、意味が抽象的・形式的になっていて、独立しては使われず、具体的・実質的な意味を補う修飾語を伴って使われるもの。(以下略)」

『日本語学研究事典』明治書院 2007

## ・実質名詞としての用法

- (1) このネクタイは昨日買ったものだ。 / 私の夢は宇宙飛行士になることです。 /  
ここは暮らしやすいところですね

## ・接続助詞的用法

- (2) 日本に来たもののまだ富士山を見ていない。 / 嬉しいことに今年は受験者が増えた。 /  
犯人が映画館を出るところを捕まえた。

## ・助動詞的用法

- (3) 親の言うことは聞くものだ。 / とにかく睡眠を充分とることです。 /  
今、勉強しているところです。

## ・終助詞的用法

- (4) だって、行きたいんだもの(もん)。 / まあ、御精が出ますこと。

## 2. 「もの」と「こと」に関する先行研究

## 2.1. 寺村 (1981)

	もの	こと	
食べる	○	×	
忘れた	○	○	がない。
する	×	○	はないか。
書く	○	○	
言う	×	○	

## ・「Xは…ものだ」

- (5) 運命というのは分からぬものだ。(永井隆「ロザリオの鎖」)
- (6) 自然の研究に今日のような仕方で数字を使うという考えは太古以来あったものではなく、ある時代に人類が創造した革命的な思想なのである。(茂木勇・村田全「数学の思想」)

(7) 妻はある時、男の心と女の心はどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかと言いました。(漱石「こころ」)

「もの」は例えば「石」、「太鼓の音」、「ビール」のような「物理的な具体的存在」だけでなく、これらのような「心理的な具体的存在」も指し得る。

・「Xは…ことだ」

(8) 意地と見栄を張る商売だから、借金を返すための借金など出来たことではなかったのだ。(有吉佐和子「香華」)

(9) 「経世済民」とは、世を治め、人を救うことだ。(天声人語 '73.4)

(10) コッホがエジプトの[コレラの]流行に際してコレラ菌を発見したのは一八八三年のことである。(天声人語 '69.9)

「コトの対象は、命題で表されるような内容や、動詞、形容詞で表わされる動作、作用、変化、状態、属性などを一般的に概念として表したもの、である。モノが個別的であるのに対してコトは一般的、モノが感覚(五官)ないしそれに準ずる心理作用によって把握される対象であるのに対して、コトは思考によって把握される対象、発話や知識の内容である、というように対置できるかと思われる。」

## 2.2. 原田・小谷 (1992)

「もの」とは不変的存在物であり世間でのありかたである。そして、その存在物やありかたには一定の規範論理が貫かれている。この時間的に不変な存在物は、具象物が時間的に不変であり恒常的であることと通じている。(中略)

一方、「こと」で表現された文の場合には、その事柄は生成変化し不動ではない一事象の話者の経験を示しているのであり、その意味では可変的な性質の事例である。」

(11) 数学の分野では、基礎的な計算力がどんなに大切な {a. もの / b. こと} であるかがよく知られている。

(12) 彼の元気のなさをみれば、あの出来事が彼にとってどんなに大変な {a. もの / b. こと} であつたかがわかる。

(13) 病気で一日中寝ているのがどんなに辛い {a. もの / b. こと} であるかは君のような健康な人間には理解してもらえないだろう。

(14) 私にとって、妻の死がいかに辛い {a. もの / b. こと} であつたかは誰にも想像できるまい。

(15) どこの観光地も紙屑や空き缶で美観が損なわれているということは、観光客の公德心の欠如を示すものである。

(16) 今回の選挙で投票率が 60 パーセントに達しなかつたことは、有権者が政治に対していかに無関心であるかということを示すものといえるだろう。

(17) 海外旅行者が急増していることは日本経済の成長を端的に物語るものと見てよい。

### 2.3. 池上 (1981)

「〈もの〉と〈こと〉は外界における存在と相互排他的に区分する範疇ではなく、もっぱらわれわれの認識の様式に関係した範疇ということになる。〈もの〉は〈個体〉中心的な見方から生み出されるものであるし、〈こと〉は〈全体的状況〉中心的な見方から生み出されるものである。外界の存在の中には、〈もの〉として捉えられがちな対象(例えば、歩く人間)と〈こと〉として捉えられがちな状況(例えば、春の到来)とがあるが、それぞれを逆に〈こと〉(つまり、その対象を含んだ状況)または〈もの〉(つまり、状況の中からある対象を括り出す)として捉えることも可能である。日本語では〈こと〉的な捉え方が優位に立っているようであるし、反対に英語では〈もの〉的な捉え方への指向性が明らかに強い。」

(18) a. He killed (hit, touched) John. / b. 彼は太郎を殺した。(を殴った。に触れた。)

(19) a. Do you know him? / b. あなた、彼を / のことを知ってるの。

(20) a. You love John, don't you? / b. あなた、太郎さんが / のことが好きなのね。

(21) a. Please listen to me. / b. \*私を / 私の言うことを聞いてください。

(22) a. Do you know of the millions in Asia that are suffering from protein deficiency because they get nothing but vegetables to eat?

b. 手に入る食物と言えは野菜ばかりのため、蛋白質不足で苦しんでいるアジアの何百万人の人たちを知っていますか。

c. アジアの何百万人という人たちが手に入る食物と言えは野菜ばかりのため、蛋白質不足で苦しんでいることを知っていますか。

(23) a. 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふのかぜやとくらむ (紀貫之)

b. 雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ (二条后)

『古今和歌集』

「ふつう「もの」として捉えられるものが「こと」として捉えられたり、逆にふつう「こと」として捉えられるものが「もの」として捉えられる—これは「こと」が「もの」として捉えられるものを蔵するからである。しかし、このことは、「こと」とは要するに「命題」的な存在、「もの」とは「項」的な存在を意味するというふうに解されてはならない。「こと」的であることの本質は、「もの」的な要因をすべて全体の中に融解し去っているということである。それは、連続体の一部にすぎない。」

## 2.4. 大野(1974)

「コトが時間的に推移し、進行して行く出来事や行為を指すに対して、モノの指す対象は、時間的経過に伴う変化がない。存在としてそのまま不変である。」

## 2.5. 森田(1980)

「事」は、成起し、出現し、変動し、終了する現象や事態。」「物」は生成され消滅することもあるが、本来は変動しない形ある物体を指している。」

## 2.6. 山梨(1995)

「外部世界の事象は、時間軸にそった連続的でダイナミックな〈過程〉としてとらえる場合と、時間的なプロセスの側面を捨象し、非連続的にスタティックな構成体としての〈モノ〉としてとらえる場合が考えられる。一般にこの二つの認知のモードのうち、前者の〈過程〉的な認知は動詞によって、また後者の〈モノ〉的な認知は名詞によって表現される。」

## 3. 「もの」の意味用法の拡がり

### 3.1. 実質名詞としての用法

- (24) ものとものとがぶつつかる音がする。
- (25) おなかをこわして、ものが食べられない。
- (26) 昨日買ったものの中に、不良品がある。
- (27) a. ?? 子供にものを与えてください。  
b. 子供にものを与えないでください。  
c. その父親は毎日子供にものを与えて、甘やかしていた。
- (28) 「X というもの」  
a. {鉛筆・新聞・大学・食べ物・テレビ} というもの  
b. {事実・結果・運命・習慣・歴史・可能性} というものはすぐにはわかりませんよ。  
c. 当分の間というものは、それ以来(それから)というものは
- (29) ものに例える / ものは試した / ものには順序というものがある / (ものに憑かれる)
- (30) ものになる / ものにする / ものを言う / ものの数にも入らない / ものともせず / ものが分かった人

### 3.2. 「ものだ」の表現機能

- (31) a. このケーキ、とてもおいしいから、ひとつどう？  
b. このケーキ、とてもおいしいものだから、ひとつどう？
- (32) a. 鎌倉の大仏って、大きいなあ。  
b. 鎌倉の大仏って、大きいもんだなあ。

・「[X]は[[〈修飾語〉]もの]だ」(説明対象—説明)

- (33) 骨董はいじるものである。一方、美術は鑑賞するものである。(本性規定)
- (34) 人間というものはいつかは死ぬものである。(本性規定)
- (35) 男というものは痛いことや苦しいことを人に見せないものだ。(当為)
- (36) 「初めてのデートというものはとても緊張するものだ。」(事実の再認識)

・「[[〈修飾語〉]ものだ]」(ことがらの存在・成立を述べる)

- (37) ホームステイ先では、その家の子供達と冗談を言い合ったり、ふざけ合ったりして、楽しい時を過ごしたものだ。(回想)
- (38) 「月日のたつのは早いものだ。」(詠嘆)
- (39) 「何でもやれば出来るのだなあ。」(詠嘆)
- (40) 「一日も早く孫の顔が見たいものだ。」(願望)
- (41) 「よくそんなことが言えるもんだな。」(驚き)
- (42) 「少しは真面目にひとの話を聴くものだよ。」(当為)
- (43) 夜遅く電話をかけるものではない。(妥当性の否定)
- (44) 夜遅く電話をかけないものだ。(当為)
- (45) 彼は裏で何をしているか分かったものではない。

### 3.3. 「もの」を接頭語として含む合成語

(46) 「もの」を接頭語として含む合成名詞

- a. 「もの+動詞連用形」: もの案じ、もの言い、もの忌み、もの売り、もの置き、ものおじ、もの惜しみ、もの覚え、もの思い、もの書き、もの語り、もの狂い、もの乞い、もの越し、もの差し、もの知り、もの好き、もの尽くし、もの取り、もの干し、もの学び、ものまね、もの見、もの持ち、もの詣で、ものもらい、もの分り、もの別れ、もの忘れ、もの笑い
- b. 「もの+の+名詞」: もののあわれ、ものの数、ものの具、もののけ、ものの上手、ものをついで、ものの道理、もののはずみ、ものの本
- c. 「もの+名詞」: もの音、ものかげ、もの心、もの腰、もの事

(47) 「もの」を接頭語として含む合成動詞

- a. 「もの+動詞」: もの語る、ものする、もの足りる、もの慣れる、もの申す、
- b. 「もの」を接頭語として含む名詞を語幹とするサ変動詞: ものおじする、もの見する、もの忘れする
- c. その他: もののけだつ、もの語りめく

(48) 「もの」を接頭語として含む形容詞

- a. 「もの+形容詞」: もの憂い、もの恐ろしい、もの堅い、もの悲しい、もの狂おしい、もの寂しい、もの騒がしい、ものすごい、もの珍しい、もの柔らかい

b. その他：もの見高い、ものものしい、(古典語 ものし)

「何事をもさして物と言ふは、たとへば、よろづのもののかたち・ことわり定まりてゆるがすべからぬにたとへなして言ふほどの心なり。」 『あゆひ抄』 富士谷成章

#### 4. 「こと」の意味用法の拡がり

##### 4.1. 実質名詞としての用法

- (49) ことの起こり / ことを起こす / ことによってはあり得る / ことの次第を伝える  
/ ことここに至る / さあ、ことだ
- (50) 私のことを知らないくせに
- (51) 茶道のことなら彼に聞いてください。
- (52) いいつけられたことは何とかできた。
- (53) 我慢せんならんこともたくさんある。
- (54) 電話で言えることとも思わなかったので失礼しました。
- (55) 誰もがそう考えることは明らかだった。
- (56) 皆が気をつかっていることはわかっていた。

##### 4.2. 「ことだ」の表現機能

- (57) 「経世済民」とは、世を治め、人を救うことだ。(=(9))
- (58) 病気を治したかったら、医者言うとおりにすることです。
- (59) 君がそこまで心配することはないよ。
- (60) 天の河と大地の交合の前では、人々の営みがいかに小さく、はかなく見えることか。

##### 4.3. その他の成句的表現

- (61) この地方では四月でも時々雪が降ることがある。(場合・可能性)
- (62) 四月に大雪が降ったことがある。(場合・可能性)
- (63) こんど会社をやめて喫茶店を始めることにしました。(決意・決定)
- (64) 定年で会社をやめることになりました。(決定)
- (65) うちの会社は近く M 物産に吸収されることになっています。(決定)
- (66) 彼女は 10メートル離れた直径4センチの的のまん中を射ぬくことができる。  
(可能)
- (67) アキレスが亀の出発点まで来るうちに、亀はいくらか前進している。その前進分に彼が追いつくまでに、亀はさらに前進している。以下これと同じことがどこまでも繰返されて、亀はつねにアキレスの少し前にいることになる。(村田全・茂木勇「数学の思想」)

- (68) 太郎は飛行機がふもとに墜落する の / \*こと を見た。  
 (69) 太郎は花子がピアノをひく の / \*こと をきいた。  
 (70) 正幸は背筋が寒くなる の / \*こと を感じた。  
 (71) 正幸は屋根裏に隠れる ??の / こと を思いついた。  
 (72) 係員はたけしに部屋から出る ??の / こと を命じた。  
 (73) 新聞はストが中止になった ?の / こと を伝えた。  
 (74) 歌を歌うのを聞く / 歌を歌うことを聞く

## 5. 「もの」と「ところ」

### 5.1. 「もの」の有界性・「ところ」の無界性

- (75) 海上の船 / \*船下の海 霧の中の人 / ??人の周りの霧  
 (76) a. 「仕事をしているところである」  
 b. 'be at work' (cf. 'be at the door')  
 c. 'an der Arbeit sein' (cf. 'an der Tür sein')  
 (77) a. 「小説を書く」 / 「小説を書いている」  
 b. 'write a novel' / 'be writing a novel'  
 (cf. 'be on writing' → 'be a-writing' → 'be writing')  
 c. 'ein Roman schreiben' / 'an einem Roman schreiben'  
 (78) 「それが問題だ」 / 「そこが問題だ」  
 (79) 「それ / そこを知りたい」 / 「それ / ? そこを知ったからには」

### 5.2. 「もの」と「ところ」の両義性

- (80) a. I went to the station.  
 b. \*I went to it. / I went there.  
 (81) a. 私は駅へ行った  
 b. \*私はそれへ行った / 私はそこへ行った  
 (82) a. He came to me.  
 b. 彼は私のところへきた。  
 (83) 天皇陛下におかせられ(まし)ては、自ら杉の苗をお植えになりました。  
 (84) a. だれですか。  
 b. どちら様でいらっしゃいますか。  
 (85) a. どこへ行くの。  
 b. どちらへお出かけですか。  
 (86) a. What is the capital of Japan ?  
 b. 日本の首都はどこですか。

- (87) a. What is the next station ?  
 b. 次の駅はどこですか。
- (88) a. ここはどこですか。  
 b. Where am I ?
- (89) a. お住まいはどこ/どちらですか。  
 b. Where do you live ?  
 b'. Where is your house ?

#### 参考文献

- AOKI Saburo (1994): « Nom de chose, détermination et énonciation : à propos du nom formel *MONO* en japonais », 『日仏語対照研究論集』, 日仏語対照研究会, pp.134-148.
- 揚妻祐樹 (1991): 「実質名詞「もの」と形式的用法とのつながり」, 『東北大学文学部日本語学科論集』 1, pp.2-12.
- 池上嘉彦 (1981): 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- (1998): 「〈モノ〉と〈トコロ〉—その対立と反転」, 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, 汲古書院, pp.864-887.
- 井島正博 (1998): 「形式名詞述語文の多層的分析」, 『成蹊大学一般研究報告』 30, pp.1-93.
- 大野 晋 (1974): 『日本語をさかのぼる』, 岩波書店.
- 寺村秀夫 (1981): 「「モノ」と「コト」」, 『馬淵和夫博士退官記念 国語学論集』 大修館書店, pp.743-763.
- (1984): 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版.
- 橋本 修 (1990): 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」, 『国語学』, 163, pp.101-112.
- 原田登美・小谷博泰 (1992): 「日本語「もの」と「こと」」, 『甲南大学紀要 文学編』 84, 甲南大学, pp.1-34.
- 森田良行 (1980): 『基礎日本語』, 角川書店.
- 山口佳也 (2000): 「「もの」の用法概観」, 『私学研修』 154-155, 財団法人私学研修福祉会, pp.104-117.
- 山梨正明 (1995): 『認知文法論』 ひつじ書房.
- 吉川武時編 (2003): 『形式名詞がこれでわかる』 ひつじ書房.